

最澄における末法思想の受容と展開について

進 藤 浩 司

一、問題の所在 日本仏教に多大な影響を与えた思想に末法思想がある。末法思想は、平安後期から鎌倉期に大流行したことが知られるが、その萌芽はすでに平安初期に見ることが出来る。日本天台宗の開祖、最澄（七六六／七七七～八二二）は、日本で最初期に末法思想を本格的に受容した人物として知られている。最澄の末法思想が、同時代との関わりをいかに持ち、思想史上の役割を担ったのか、また、その末法思想が当時の仏教の枠組みの中で、最澄の教学にいかに関与を与えたかについては、従来あまり研究されていない。本研究では、奈良末から平安初期の南都仏教の動向にも注意を払いつつ、最澄の末法思想とその救済論の持つ思想史的意義を明らかにしたい。

二、法滅への意識の高まりと最澄の登場 最澄の末法思想の思想史上の意義を考えるに当たって、最澄登場以前の我が国の法滅の観念を確認しておきたい。法滅の観念は、日本では天平十五年（七四三）や天平宝字四年（七六〇）の記述に現れ

るのが初めと言われている。これらは当時を像法と規定しており、末法の語はない。またその法滅への危機感にはいまだ深刻な意識は見られないとされている。しかし、奈良末から平安初期にかけて、仏滅年代の考察や三時思想に照らして、当時がどの時代になるのかという記述はとも多い。奈良時代の三論学の大家、智光は当時を「末世」とし、最澄と大乘戒壇建立をめぐるつては論敵であった護命や、天長年間に護命等とともに活躍した玄叡も、「像末」や「像季」としている^①。護命や玄叡は、当時あった諸宗の空有についての諍論を、法滅の一つの現れとしており、この基準が常套句的なものであったことが窺われ、その法滅への危機意識の深さについては疑問視されるが、ともあれ一定の危機感が前提となった記述と見ることはできるだろう^②。本格的な末法思想の表明は、景戒や善珠に始まると言われている。特に景戒は、当時をすでに末法として見ており、その深刻な末法意識から時代認識としてはむしろ例外的な存在とされている。最澄は、当時を

像法末とする点では護命らと一致しつつも、深刻な法滅への危機意識という点では景戒に近いと言われる。このように三時の中で當時をどの時代とするのか、またその危機意識においても様々な態度があり、最澄もそれを受けていることがわかるが、このことは当時、像法・末法という法滅をいかに克服・処理するのかが、仏教界のある程度の課題として認識されてきたことを意味している。

最澄が深刻な法滅への危機感を持っていたことの論拠として上げられるのが、比叡山入山当時に書かれたという『願文』に見える「牟尼之日久隱、慈尊月未照。近於三災之危、没五濁之深⁽³⁾」である。ここには最澄が末法での救いをどのように考えていたかは、記されていない。しかし、法滅や末法をどのようにに考え、自己の仏教に位置づけるかは、最澄にとって当初からの課題であったことが窺えるであろう。時代の要請でもあった法滅の克服は、深刻な法滅への危機感を持つ最澄にとつても大きな課題であり、当時の思想的背景の上に成り立ったものであることがわかる。

三、**円機と末法** 最澄が、その末法思想（最澄は當時を像季とするが、末法を予測した論述を展開しているので「末法思想」として扱う。）について独自性を発揮するのは、南都や会津の徳一との論争以降である。弘仁七年（八一六）の『依憑天台集序』に「我日本天下、円機已熟、円教遂興⁽⁴⁾」とある。「円機已熟」

最澄における末法思想の受容と展開について（進 藤）

とは、円教が広まるべき機がすでに熟した、天台宗が広まる時が来たということであるが、この言葉と最澄の末法思想は大きく関連していると考えられる。ともに時と機の問題だからである。ところで、『依憑天台集』は本文が書かれて三年後に序文が著されており、序文には諸宗への攻撃的な態度が見られることから、「円機已熟」については、諸宗との対立的な関係の中から生み出されたと考えられている。しかし、従来の研究では、諸宗との対立の側面から円機を考えることが中心となっていたが、末法（法滅）をいかに自己の仏教の中で処理し、自らの時代を位置づけるかという、最澄自身の思想的課題については必ずしも研究・評価されてはいない。そこで、次に円機と末法という、時機の問題がいかに関係するのかを考える。

この問題を考察するに当たって、まず当時の仏教界の思想的課題ともつながることであるが、末法が国家にとつて持つ意味を確認しつつ、最澄の立場と意図を明らかにしておくたい。

(1) 末法思想と国家の守護について 律令制の当時にあつて、桓武天皇の庇護のもとで、天台宗を興し国家を守護する役割を担っていたことは、最澄の仏教の位置づけを考える上で重要な要素であろう。最澄は『天台法華宗年分学生式』で、弟子達に『法華経』・『金光明経』・『仁王経』等を読誦、また

『勸奨天台宗年分学生式』で、『法華』・『金光明経』の両経を修めることを定めている。⁽⁵⁾ 金光明と法華の二つを国家の重要經典として定めることは、道慈以来の枠組みであり、最澄の創見ではない(天平六年官奏)。最澄は、自宗の立場から、法華を上位においているが、国家を守護するという当時の仏教の枠組みにおいて朝廷の意に添おうとしていることがわかる。『法華経』は、この枠組みの中での流布を主張されている。朝廷は最澄に国家を守護する力を求めているが、このことと法滅との関係はどうなっているのだろうか。末法思想は、『願文』に見たように「五濁」の時代であり、仏法の力が衰える時代であるので、国家を守護するべき者が末法の視点に立つことは、仏教の威力自体を否定することになりかねない。ことに最澄は、天台法華宗の優位性を諸宗に対して宣言していたのであり、末法の意識を強く持つことと、自宗の救済力をいかに関連づけるかは些末な問題ではない。景戒が個人的な感慨から末法思想に立ったのとは、立場も目的も異なる。この問題について、『顕戒論』には籠山の根拠として『法滅尽経』を引き、「今已知時。誰不登山也⁽⁶⁾」と言い、また十二年籠山し、諸大乘経を誦誦し念誦することによって、最下鈍の者でも験を得て国家を守護すると説いている。⁽⁷⁾ 末法の負の側面を、籠山によって国家に対する守護力へと結びつけた最澄の努力が窺われるであろう。

(2) 円機と末法 国家との関わりから、天台宗における末法の位置づけや、末法での救済を模索する必要のあった最澄は、諸宗との対立に当たって「円機已熟」の思想を述べている。「円機已熟」は天台の優位であることを述べたものであるが、その内容は円機の機と、その機が熟したという時の問題でもある。同じく末法、法滅の思想も時と機が深く関わる問題である。

最澄は、『守護国界章』において、徳一『止観論』を批判して、今の時代には迂回道を受けるべき機はないという説を展開する。当時について、「正像稍過已、末法太有近。法華一乘機、今正是其時。何以得知。安樂行品末世法滅時也⁽⁸⁾」と述べている。円機についての優れた研究がすでに多数あるが、⁽⁹⁾ それらによると円機は上根の者に対してのみ使われるのではなく、寧ろ下根の者に対して使われていることが明らかにされているが、円機が末法の時代の機根であることから、逆に円機とはいかなる機根であるかを説明する根拠となると思われる。円機については、使用された経緯から、ともすると他宗に天台の優位を主張した側面にのみ注意がいくが、末法とつながった概念であることがわかれば、比叡山入山当初から持っていた、末法をいかに位置づけるかという思想上の課題の解答でもあったことがわかるであろう。そしてその「時」の根拠を「安樂行品」に求めている。これは末世での救済を

説く『法華経』の特徴に因るものではあるが、徳一と、「機」の問題を論じるのに際して、論拠にあげられたことに注目する必要がある。最澄の論ずる時と機は、末法であることと、その末法に合った救済力を持つ『法華経』へと収斂している。この意味で、最澄の末法に対する問題意識は一貫しているのである。円教の広まるべき根拠を末法に求めた最澄にとって、當時を末法に甚だ近い時代とすることは、最澄の『法華経』についての思想を集大成した晩年の『法華秀句』巻下に、「後五百歳」に注目して法華天台の広まる根拠としており、¹⁰⁾『法華経』の文句によって、最澄當時を、「後五百歳」、あるいはそれに近い時期であることを前提としていることにも腐心の跡が窺われる。『法華経』の「後五百歳」が具体的にいつから始まるのか、またそれが末法の時代であるのかについては、最澄以前の中国の諸家にあつては明言がないことであるとい¹¹⁾う。後の日本仏教で大きく展開すると言われるこの問題は、平安初期最澄によって具体的な展開を見せ始めたと考えられる。ここには「円機已熟」のことは説かれぬが、最澄の末法への思想的取り組みの集大成ともいえるものであり、後五百歳をもって法華天台が広まるとしている点は、「円機已熟」と趣旨としては同様のものであることが窺えるだろう。

四、小結 最澄は當時を像末とする点で、南都の多数派と一致しつつも、末法にきわめて近いとの意識を持っており、末

最澄における末法思想の受容と展開について(進 藤)

法において国家をいかに救済するかという課題を持っていたことがわかった。円機についての議論も、この延長上にあるものであると考えられる。また『法華経』自体には、仏滅年代に関する記述はないが、末法の具体的な時期と救済の根拠を『法華経』に求めることで、国家への守護とともに法華一乗による救済を模索し、一応の完成をさせたことが、最澄の末法思想の歴史的意義となるだろう。最澄が、いつから『法華経』と末法の救いを対として考えるようになったのか、その経緯等については、最澄の師承なども考えなくてはいいないが、それは機会を改めて考察したい。

- 1 石田瑞磨「日本における末法思想」(『仏教思想2 悪』平楽寺書店 一九七六)参照。
- 2 大正蔵巻七一、二八頁下段。巻七〇、一一九頁中段等。
- 3 『伝教大師全集』(以下『伝全』)巻一、一頁。
- 4 『伝全』巻三、三四三頁。
- 5 『伝全』巻一、二頁。同一四頁。
- 6 『伝全』巻一、一五六頁。
- 7 『伝全』巻一、一五四頁。
- 8 『伝全』巻二、三四九頁。
- 9 淺田正博「伝教大師における円機已熟思想の検討」(『日本仏教学会年報』四九号 一九八三)等参照。
- 10 『伝全』巻三、二七四〜七頁。
- 11 丸山孝雄「末法と後五百歳」(『印仏研』二四— 一九七五)等。

〈キーワード〉 最澄、末法、像季、像末、徳一、法華経、円機、

円教

(名古屋大学大学院)